

## 14-15世紀東アジア海域世界と韓日関係

—倭寇の構成問題を含む—

孫承喆\*

1. 序論
2. 倭寇の侵入状況と略奪形態
3. 『三綱行実図』の倭寇関連記述
4. 「高麗・朝鮮人説」と「済州島海民説」の問題点
5. 結論

### 1. 序論

歴史的に東アジア海域は韓・中・日東アジア三国間の文化疎通と物資交流の重要な連結通路であり、同時に衝突と葛藤が重なった空間であった。特に14-15世紀の黄海と東シナ海は倭寇の出現により、日本にとっては略奪と加害の空間であり、高麗・朝鮮にとっては被害と警戒・恐怖の空間であった。そしてこの時期の韓日関係は、この海域を中心に略奪と加害の歴史から交流と共存の歴史に展開されていっていることを見ることができる。

今まで、この時期の韓日関係史研究は、主に倭寇問題と通交関係の成立過程についての研究が主流をなしていた。その研究状況については金普漢「倭寇研究の学術史的検討」、中田稔「日本における倭寇研究の学術史的検討」、韓文鍾「朝鮮前期韓日関係史研究の学術史的検討」、田代和生ほか「第1期韓日歴史共同研究報告書第3巻、偽使篇」および荒木和憲「16世紀日朝交流史研究の学説史的検討」などが詳細に報告したところである。

ところで倭寇研究の場合、既存の研究成果は大部分が倭寇の発生・猖獗・消滅や根拠地の問題、倭寇構成と集団の実態などに関して集中し、肝心の被害当事者である高麗・朝鮮人についての苦しみの実相はほとんど扱われていない。無論、略奪の前面に露出されていた彼らの苦しみを記述した史料が少ないためでもあるが、研究の方向も倭寇の侵入とそれに対する対応という側面に集中していたためである。

倭寇の侵入と略奪の対象地は韓半島であり、残酷な略奪の現場には高麗・朝鮮人が住んでいた。

---

\* 江原大学校人文大学史学科教授

『朝鮮王朝実録』には1380年8月、倭船500隻が鎮浦に侵入したときの状況を次のように記録している。

辛禰6年(1380)庚申8月、倭賊五百隻が鎮浦に船をつないでおいて、下三道に侵寇し、沿海の州郡を殺戮して火をつけたのでほとんどみな消えてしまい、人民を殺して捕まえたのも数え切ることができないほどだった。死体が山と野原を覆い、穀物をその船に運搬したところ、米が地に捨てられて厚さが一尺ほどにもなり、拉致した子女を斬り殺したものが山のように多く積まれて、通り過ぎたところごとに血の海を為した。2、3歳になる女兒を捕らえて髪を剃って腹を割いてきれいに洗って米・酒と一緒に天に祭祀を執り行ったので、三道沿海地方が蕭然として空っぽになった。倭賊の侵寇以降にこのようなことはかつてなかった<sup>1</sup>。

高麗末、倭寇の侵入の中で最も規模が大きかった1380年8月、いわゆる鎮浦大捷の時のことである。倭寇の略奪の様子はこのほかにも様々なところに記録されているが、この部分について今まできちんと扱った研究はない。このような意味で被害の当事者であった高麗・朝鮮人に倭寇の加害のありさまがどのように記憶されて記録されていたのかを再照明してみることは倭寇の実体を明らかにする重要な作業のうちのひとつになるだろう。

本文では倭寇に関連する様々な史料のなかで<sup>2</sup>、特に絵で倭寇の加害のありさまを伝える『三綱行実図』に収録された内容を分析して、現在の韓日両国で歴史争点の対象になっている「倭寇の根拠地ないしは主体の構成問題」にアプローチしてみたいと思う。

## 2. 倭寇の侵入状況と略奪形態

倭寇が出現する前から高麗は金海に客館を設置して進奉船の往来を通じて制限的な交流を行ってきた。『高麗史』によれば、倭寇侵入は1223(高宗10)5月、金州を略奪したことから始まる。以後1225年4月、1226年正月、1227年4月、5月に主に金州と巨済、熊神県など慶尚道海岸地方に侵入した。このように1220年代に5回も相次いで集中的に起こった倭寇侵入は以前には見ることはできなかった未曾有の事件であった。これに高麗では朴寅を九州太宰府に派遣して倭寇略奪を禁止することを要請したところ、太宰小式であった武藤資頼は朴寅一行の目前で倭寇90名を処刑したという<sup>3</sup>。

では、この時期にそれまで存在しなかった倭寇がにわかに登場した原因は何だったのか。金普漢は、太宰小式が高麗の倭寇禁止要請を速やかに受け入れた状況からみると、この時期の倭寇発生の原因を鎌倉時代の公家と武家の対立である「承久の乱」に求めている。「承久の乱」の結果、武家権力を掌握していた北条氏が勝利すると、公家側を支持した西国武士たちは厳しい試練に置かれるようになっ

<sup>1</sup> 『太祖実録』巻1、太祖総書、禰王6年。孫承喆編『韓日関係史料集成』巻3、7ページ、史料10番。

<sup>2</sup> 倭寇に関連した資料としては『高麗史』『高麗史節要』『朝鮮王朝実録』『東史綱目』『東国通鑑』『老松堂日本行録』『海東諸国紀』などを挙げることができる。

<sup>3</sup> 『高麗史』巻22、高宗14年。『百鍊抄』安貞元年7月21日条。

た。その結果、西国武士は自身の所領を没収されて政治的・経済的既得権を奪われるようになったが、危機に追い込まれた武士たちが「海上武士団」を率いて海賊活動を始めたところ、その一部が高麗を略奪対象地として倭寇になったという。結果的にみると「承久の乱」以後高麗で倭寇が出現し始めたというのだ<sup>4</sup>。

『高麗史』において倭寇が本格的に出没し始めるのは、1350年(忠定王2)2月、固城・竹林・巨済に侵入したときからである。『高麗史』には次のような記録がある。

倭が固城・竹林・巨済で略奪行為をすると、合浦千戸崔禪と都領梁瑄がこれを撃破して300余名を殺した。倭寇の侵入がこのときから始まった<sup>5</sup>。

1350年は庚寅年であるため、この時に出没した倭寇を一般的に「庚寅倭寇」と称し、現在この単語は、倭寇が高麗に本格的に出没したことを意味する歴史用語として定着している。続いて同年4月には倭船100余隻が順天府に侵入して漕運船を略奪し、5月には66隻が順天府に侵入、6月には20隻が合浦に侵入して兵營に火をつけるなどの略奪をほしいままにした<sup>6</sup>。また1351年(忠定王3)8月には130余隻の倭船が紫燕島と三木島に侵入して民家に火をつけた<sup>7</sup>。この時期に倭寇船団の規模と回数が増加していることが確認できる。

このような現象は、1349年(貞和5)9月、室町幕府の内訌によって足利直冬が九州に逃亡して下ってくる時期と重なっている。九州に来た足利直冬は自分の勢力を構築して独自の支配地域を確保しようと試みた。この過程で九州の在地武士は分裂するようになり、これが倭寇の増加につながる原因であった。大規模化した倭寇はこの時から略奪と放火から漕運船奪取へと略奪の形態が変化していった。1354年(恭愍王3)4月の全羅道漕運船40余隻略奪と1355年(恭愍王4)4月の全羅道漕運船400余隻が略奪され、その形態が略奪と放火から漕運船奪取に変化している。効果的で手っ取り早く略奪するために税穀がいっぱい積まれた漕運船を狙う程度に大胆になっていった。

一方、高麗朝廷は倭寇の漕運船奪取による経済的損失で苦しんでいたが、投化した倭人については相当に友好的に受容していた。例を挙げると、投化した倭人たちを巨済と南海県に集まって住むようにさせていたが、1369年(恭愍王18)7月にこれらの倭人が背反して本国に戻った事件があった<sup>8</sup>。また同じ年の11月に倭寇が寧州・温州・礼山・沔州の漕運船を奪取したが、これは巨済島に集まって住んでいた倭人が盗賊をはたらいたものとして記録されている<sup>9</sup>。このように高麗朝廷は、南海岸一部地域に倭人が集まって住む集団居住を許可していた。

<sup>4</sup> 金普漢「東アジアの経済圏域における略奪の主役、海賊と倭寇」『中国史研究』第29巻、2004年、158ページ(金普漢「동아시아의 經濟圏域에 있어서 약탈의 주역, 海賊과 倭寇」『中國史研究』29、2004、158쪽)。

<sup>5</sup> 「倭寇固城竹林巨済合浦千戸崔禪都領梁瑄等戰破之斬獲三百餘級倭寇之侵始此」『高麗史』卷37、忠定王2年2月。

<sup>6</sup> 『高麗史』卷37、忠定王2年2月、4月、5月、6月。孫承喆編『韓日關係史料集成』卷1、125ページ、史料200-205番。

<sup>7</sup> 『高麗史』卷37、忠定王3年8月。孫承喆編『韓日關係史料集成』1、127ページ、史料209番。

<sup>8</sup> 『高麗史』卷41、恭愍王18年7月。孫承喆編『韓日關係史料集成』卷1、150ページ、史料301番。

<sup>9</sup> 『高麗史』卷41、恭愍王18年11月。孫承喆編『韓日關係史料集成』卷1、150ページ、303番。

倭人の集団居住についてはまだ研究されたことがないが、彼らは別途の居住地域で生活しながら時には倭寇になって略奪をはたらいた。しかし高麗は彼ら倭寇に対して強力に征伐して懲らしめて統制することで彼らが高麗人と力を合わせて倭寇化する可能性はほとんどなかったと思う。

以後1370年代中盤になると倭寇が再び猖獗する現象が見られる。1375年5月、倭人藤経光が家来を率いてきて降伏すると、高麗ではかれらを順天と燕岐などの地に分散配置して官衙で食糧を供給するようにした。藤経光の無礼な態度に対して、その年の7月高麗朝廷は全羅道元帥金先致に藤経光を誘い出して殺すように言ったが、この内容が事前に露見して藤経光と彼の部下を逃したという。『高麗史節要』には次のように記録されている。

以前には倭賊が州・郡を侵犯しても人は殺さなかったが、この後から怒りが爆発して毎回侵犯するごとに婦女子と子供までもみな殺すので、全羅道と楊広道の海辺の邑が空っぽになった<sup>10</sup>

とある。

この事件と関連して1370年代中盤以後、倭寇猖獗の原因を高麗朝廷の失政として説明する研究がある<sup>11</sup>。しかしこれよりはむしろ次のように考えられる。今川了俊が九州探題に任命されて、九州地域に独自の権力を強化する過程で在地勢力の離脱を加速化した。その結果、これら「反探題勢力」が倭寇の主力になり、彼らが『高麗史節要』1377年8月条に登場する「逋逃輩(逃亡した輩)」として把握される<sup>12</sup>。結局、1370年代中盤以降猖獗した倭寇の主体も、九州の勢力再編過程で派生した副産物であったと思われる<sup>13</sup>。

ここで高麗時代倭寇が初めて侵入した時から倭寇問題が一段落したと思われる癸亥約条時期まで韓半島に侵入した倭寇の侵入回数をみてみよう。

倭寇侵入についての時期区分は何種類かの説があるが<sup>14</sup>、1350年の庚寅倭寇を基準とすると、第1期1350年-1374年(忠定王-恭愍王)、第2期1375年-1389年(禡王-昌王)、第3期1390年-1443年(恭讓王-朝鮮太祖から世宗)に区分できよう。その理由は、第1期は草創期であり倭寇の出現から倭寇の猖獗時期まで、第2期は猖獗期で倭寇略奪が本格化する時期から極盛した時期、第3期は朴葦

<sup>10</sup> 『高麗史節要』卷30、辛禡元年7月。孫承喆編『韓日関係史料集成』卷2、224ページ、史料285番。

<sup>11</sup> 中村榮孝『日朝関係史の研究』上、吉川弘文館、1965年、145-146ページ。

<sup>12</sup> 『高麗史節要』卷30、辛禡3年8月、「日本遣僧信弘來報聘書云草竊之賊是逋逃輩 不遵我令未易禁焉」孫承喆編『韓日関係史料集成』卷2、243ページ、史料348番。

<sup>13</sup> 金普漢「少貳冬資と倭寇の一考察—少貳冬資の殺害と関連して」『日本歴史研究』第13巻、2001年(金普漢「少貳冬資와 倭寇의 일고찰—少貳冬資의 피살과 관련해서」『일본역사연구』13, 2001)参照。

<sup>14</sup> 田中健夫は大きく4つの時期に分けた。第1期は1350年2月以後の初期段階、第2期は恭愍王時代(1352~74年)で倭寇活動が本格化した時期、第3期は倭寇活動の全盛期で辛禡王代(1375~88年)に最高点に達した。第4期は倭寇勢力の衰退期で、高麗恭愍王時代から朝鮮太祖・定宗・太宗時代に該当する(田中健夫『倭寇と勘合貿易』至文堂、1966年)。田村洋幸氏は大きく分けて3期、また細分して6期に区分した。初期は1350年~73年で、倭寇に対する無対策の時期であった前半期(1350~62年)と、積極的に日本に倭寇禁止策を要請した後半期(1364~73年)に分ける。全盛期である中期は1374~89年であり、倭寇猖獗期である前半期(1374~80年)と徐々に衰退していく後半期(1381~89年)に分けた。倭寇終末期は1390年~1418年で、小規模の非組織的倭寇と大規模船団の倭寇が混合する前半期(1390~1400年)と小規模化する後半期(1401~18年)に分けた(田村洋幸『中世日朝貿易の研究』第2章、三和書房、1967年)。

の対馬征伐後、倭寇が小康状態になり癸亥約条によって平和的な通交者に転換されるまでの時期に分けられるためである。また、1期には略奪の対象が主に糧穀であったが、2期には殺人と拉致を行った時期でもある。

<高麗時代倭寇侵入回数><sup>15</sup>

王代	西紀	羅鐘宇	田村洋行	田中健夫	王代	西紀	羅鐘宇	田村洋幸	田中健夫
高宗10	1223	1	1	1	16	1367	1	1	0
12	1225	1	3	1	18	1369	2	2	1
13	1226	2	2	3(2)	19	1370	2	2	2
14	1227	2	1	2	20	1371	4	4	1
元宗4	1263	1	1	1	21	1372	19	11	10
6	1265	1	1	1	22	1373	6	7	3
忠烈王6	1280	1	1	1	23	1374	12	13	10(11)
16	1290	1	1	1	禰王1	1375	10	16	11(7)
忠肅王0	1323	2	2	2	2	1376	46	20	39(12)
忠定王2	1350	7	6	6	3	1377	52	42	54(29)
3	1351	4	3	4	4	1378	48	29	48(22)
恭愍王1	1352	8	12	7	5	1379	29	23	37(15)
3	1354	1	1	1	6	1380	40	21	40(17)
4	1355	2	2	2	7	1381	21	19	26(19)
6	1357	4	3	4	8	1382	23	14	23(12)
7	1358	10	10	6	9	1383	50	28	47(24)
8	1359	4	5	4	10	1384	19	16	20(12)
9	1360	8	5	5	11	1385	13	16	12
10	1361	10	4	3	13	1387	7	5	7(4)
11	1362	1	2	1	14	1388	20	17	14(11)
12	1363	2	2	1	昌王1	1389	5	11	5
13	1364	11	12	8(10)	恭讓王2	1390	6	2	1
14	1365	5	3	5(3)	3	1391	1	1	2
15	1366	3	3	0	4	1392	1	2	1
					計		529	408	484(302)

<sup>15</sup> 羅鐘宇氏の統計(『韓國中世對日交渉史研究』円光大学校出版局、1996年、126ページ)『韓國中世對日交渉史研究』원광대학교출판국、1996、126쪽)、田村洋幸の統計(『中世日朝貿易の研究』三和書房、1967年、36-37ページ)、田中健夫の統計(『中世對外交渉史の研究』東京大学出版会、1957年、4ページ)を参考に作成した。

〈朝鮮初期倭寇侵入回数〉<sup>16</sup>

年度	回数	年度	回数	年度	回数	年度	回数
1392 太祖元年	2	1403 太宗3年	8	1419 世宗元年	7	1433 世宗5年	3
1393 2	10	1404 4	6	1421 3	3	1436 18	1
1394 3	14	1406 6	12	1422 4	4	1437 19	1
1395 4	5	1407 7	6	1423 5	1	1438 20	1
1396 5	13	1408 8	7	1424 6	2	1440 22	1
1397 6	11	1409 9	2	1425 7	2	1442 24	1
1399 定宗元年	11	1415 15	1	1426 8	5	1443 25	2
1401 太宗元年	4	1417 17	1	1428 10	1		
1402 2	5	1418 18	1	1430 12	1	合計155回	

### 3. 『三綱行実図』の倭寇関連記述

#### 1) 『三綱行実図』の編纂経緯

1428年(世宗10年)晋州で金禾が父を殺害する事件が起こったが、世宗はこの知らせを聞いて大きく驚き責任を感じたあまり、この年10月に経筵で孝悌の心を起こし、風俗を厚くする方策を研究するようにした。これに対し、卞季良は高麗時代に権溥が著した『孝行録』のような本を広く刊布して民たちに読ませるのが良いだろうと建議し、世宗は直提学悞循に命じて集賢殿で編纂させた。そして4年後である1432年6月に草稿が完成して進上され、1433年2月に刻板が完成し、1434年11月に内外に頒布した。

三綱とは君・親・夫に対して臣・子・婦が守らなければならない忠・孝・貞の三道をいい、忠臣・孝子・烈婦の代表的な例を集めて絵と行蹟を合わせて編纂したものが『三綱行実図』である。本の構成は権採の序文に記録されているように、絵をまず掲載し、続いて行蹟と詩を付した。これは読む人がまず絵を通じて興味を持ったしかる後に絵の説明を読むようにしようという意図を示している。絵の画法はみな線画であり画風は分かりづらく、誰が書いたのかは明らかにすることはできないが、『三綱行実図』が編纂された時期(1428-1432)の画員として安堅・崔逵・安貴生・裊連などがいるが、安堅は『夢遊桃源図』の作家として有名であり、『東国新統三綱行実撰集序儀軌』には安堅が書いたものと伝わっている。

権採の序文によれば「中国から我が東方に及ぶまで古今の文に記録されているところを全て探し求めて集めて閲覧し、孝子・忠臣・烈女として特別に記録するに値する者それぞれ110名を見つけ出して、先に形絵を描いて後には事実を記録し、さらに詩を付した。孝子は太宗文皇帝が下賜した「孝順事実」の詩を記録し、兼ねて臣の高祖である権溥が編纂した『孝行録』のなかで名儒李斉賢の贊を載せ

<sup>16</sup> 孫承喆『朝鮮時代韓日関係史研究』景仁文化社、2006年、44ページ(손승철『조선시대한일관계사연구』경인문화사、2006、44쪽)。

て、残りは輔臣をして分けて編纂させて、忠臣と烈女の詩は文臣に分担して書かせた。」とある。

## 2) 殺人と拉致

『三綱行実図』には倭寇の殺人と拉致に関連して、烈女7件、孝子2件など合計9件が収録されている。

### ① 崔氏が怒って罵る(崔氏奮罵)



#### <原文>

烈婦崔氏。靈巖士人仁祐女也。適晉州戸長鄭滿。生子女四人。其季在襁褓。洪武己未。倭賊寇晉。闔境奔竄。時滿因事如京。賊入里閭。崔年方三十餘。且有姿色。抱携諸息走避山中。賊四出驅掠。遇崔露刃以脅。崔抱樹而拒。奮罵曰。死等爾。汚賊以生。無寧死義。罵不絕口。賊遂害之。斃於樹下。賊携二息以去。第三兒習。甫六歲。啼號屍側。襁褓兒猶匍匐就乳。血淋入口。尋亦斃焉。後十年己巳。都觀察使張夏以聞。乃命旌門。蠲習吏役。

#### <翻訳>

烈婦崔氏は靈巖に住む士人崔仁祐の娘である。晋州の戸長鄭滿に嫁ぎ、子女四人を産み、末子は赤ん坊であった。1379年(洪武己未)に倭賊が晋州に侵入してきたので、村の人々はすべて逃げて隠れた。この時に鄭滿は用事があってソウルに行っていた。倭賊が村に入ってきた。崔氏は30歳で、容姿もすぐれていた。子供たちを連れて山の中に避難した。倭賊が四方から略奪していると崔氏に遇って刀を抜いて脅迫した。崔氏が木を抱えて抵抗し怒って「死ぬのは同じだから、盗賊に汚されて生きるよりは、むしろ義理を守って死んだ方がよい。」と罵る声が口から絶えなかったので、倭賊はどうも彼女を殺害して木の下で死んだ。倭賊が二人の子供を捕まえていき、三人目の子供習は6歳であったが死体のそばで泣き叫んで、赤ん坊は這って行って母の乳を吸って血がどくどくと口に流れ入るので、少し後にやはり死んでしまった。10年後1389年(己巳年)に都觀察使張夏が朝廷に申し上げると、旌表を命じて鄭習の吏役を免除した。

#### 【詩】

良人上計赴王京。倭寇攘陷邑城。  
汚賊幸生寧死義。中心取舍已分明。  
賊勢縱橫闔郡驚。兒被擄若爲情。  
可憐抱樹捐生處。風響依稀罵賊聲。

夫は用事でソウルに行き、倭寇は略奪して邑城を陥落させ、  
盗賊に辱めを受けるより義理を守って死のうと、心中の決意はすでに分明である。  
盗賊がむやみに暴れて村じゅうを怖がらせ、子供達と捕まって心情はどうだろうか。  
哀れなにも木を抱えて命を捨てたその場所で、しきりに響く風の音が賊を罵る声のようだ。

『高麗史節要』卷31、〔辛禍〕5年(1379)5月の記事に「倭賊の騎兵7百と歩兵2千余名が晋州を侵犯したので、楊伯淵が禹仁烈・裴克廉・韓邦彦・金用輝・慶儀・洪仁桂とともに班城県で争い13人の首を挙げたのでほうびを彼らに下賜した」と記録されている<sup>17</sup>。倭寇の侵入時期や地域を見れば「烈婦崔氏」の記事と一致する。

この内容からみると、1379年5月、倭寇が晋州一帯に侵入し、その時に晋州にいた崔氏が災難に遭った。年齢は30歳で容貌が美しかった女性を強姦しようとしたが、反抗を受けると殺害し、つづいて4人のうち2人は捕らわれ、赤ん坊は母の乳を吸いながら死に、当時6歳だった鄭習だけが生き残り、16歳の時に役を免除された。捕らわれた二人の子は鄭習より年上なので大体10歳前後と推定される。短い記事であるが、当時の倭寇の残酷行為を窺い知ることができる。

## ② 三人の娘が池に飛び込む（三女投淵）



### 〈原文〉

洪武十年三月。倭寇江華府。萬戸金之瑞。府使郭彦龍。率府民。遁于摩利山。府吏之處女三人。將見獲。遂投于江。

### 〈翻訳〉

1377年(洪武〔10年〕)3月に倭賊が江華府に侵入すると、万戸金之瑞と府使郭彦龍が府民を率いて摩利山に逃亡した。府吏の娘三人が捕まりそうになったので、とうとう江に身を投じた。

### 【詩】

倭奴昔日寇江華。闔境崩奔似亂麻。  
有女三人投水死。至今聞者動咨嗟。  
爲州環海復高山。密邇京都作險關。  
兒女尚知全志節。當時守將舉何顏。

倭奴が以前江華に侵入したので、府内全体が混乱し崩れて逃げていった。

<sup>17</sup> 『高麗史節要』卷31、〔辛禍〕5年5月、孫承喆編『韓日関係史料集成』卷2、256ページ、史料398番。『高麗史』卷121、列伝34、孫承喆編『韓日関係史料集成』卷2、74ページ、史料85番。



三人の娘が池に身を投じて死に、今でも聞く人ごとにため息をついて悲しむ。

海がとりまき、山もまた高く、ソウルに近い険しい関門であった。

女子供も節を守ることを知っているが、その時守っていた将帥がどうして顔を上げられようか。

『高麗史節要』卷30、[辛禡]3年(1377)3月の記事に「倭賊がまた江華府を侵犯したので、万戸金之瑞、府使郭彦龍が摩利山に逃亡した。倭賊がどうとう大いに略奪して之瑞の妻を捕らえていった。江華府の官吏の娘三人が賊に遇い、体を汚されないために、互いに手を取り合って江に飛び込んで死んだ。」<sup>18</sup>と記録されている。

この内容からみると、1377年3月倭寇が江華府に侵入して万戸金之瑞の妻を捕らえ、また三人の娘を強姦しようとし、これを避けて江に飛び入って自殺したことを知ることができる。

### ③ 烈婦が江に飛び込む(烈婦入江)



#### 〈原文〉

烈婦。京山人。進士裴中善女也。既笄。歸士族李東郊。善治內事。洪武庚申。倭賊逼京山。闔境擾攘。無敢禦者。東郊時赴合浦帥幕。未還。賊騎突入烈婦所居里。烈婦。抱乳子走。賊追之及江。江水方漲。烈婦度不能脫。置乳子岸上。走入江。賊持滿注矢擬之曰。而來。免而死。烈婦顧見賊。罵曰。何不速殺我。我豈汚賊者邪。賊發矢中肩。再發再中。遂歿於江中。體覆使趙浚。上其事。旌表里門。

#### 〈翻訳〉

烈婦は京山の人で、進士裴仲善の娘である。笄礼<sup>19</sup>を執り行って士族李東郊に嫁ぎ、家のことをよく治めた。1380年(洪武、庚申年)に倭賊が京山を侵攻すると、府全体が騒がしくなり、あえて防ぐ者はいなかったが、李東郊はこのとき合浦の元帥の幕に行ってまだ戻ってきていなかった。賊の騎兵が

烈婦が住む村に突入してきたので、烈婦が赤ん坊と子供を抱いて逃げたが、賊が後を追ってきた。江に至ると水がちょうど増水していたので、烈婦は逃げるできないと考え、赤ん坊と子供を岸の上に置いて江に走って飛び込んだ。盗賊が弓をひいて狙って「お前が出て来たら死を免れるだろう。」と言ったが、烈婦は賊を顧みて「なぜ早く私を殺さないのか。私がどうして賊に汚される人だろうか。」と罵し

<sup>18</sup> 『高麗史節要』卷30、辛禡3年3月、孫承詒編『韓日関係史料集成』卷2、234ページ、史料319番。『高麗史』卷121、列伝34、孫承詒編『韓日関係史料集成』卷2、74ページ、史料84番。

<sup>19</sup> 女子が15歳になると婚家に嫁ぐ以前でもかんざしを挿す儀式。

ると、賊が矢を射て肩に命中し、二回射て二回命中し、とうとう江の中で死んだ。体覆使趙浚がそのことを申し上げ、里門に旌表した。

【詩】

島夷來逼孰能當。闔境蒼皇走且。  
忍見亂兒呱岸上。自知難脫赴滄浪。  
倭寇由來性不仁。那知烈婦行眞純。  
灘聲千載猶悲咽。到此無人不愴神。

島の蛮人が迫ってくると誰がよく対処できよう、州内中の人がみな慌てて逃走する。  
赤ん坊が岸で泣くのをどうして見られようか。脱出できないのを知り江の水に走っていく。  
倭寇はもともと性質が残忍であり、真心があり純粋な烈婦の行動を分かるだろうか。  
早瀬の音が千年くらいすすり泣いて、ここに来れば悲しまない人はいないであろう。

『高麗史節要』卷31、〔辛禍〕8年(1382)6月の記事には「典法判書趙浚を慶尚道体覆使とした。この時は倭寇の侵犯がとて強勢で、各邑が騒乱して民がみな山あいにも逃亡しており、国の紀綱がなく、将帥たちは取り巻いて見るだけで戦わず、賊の勢いは日ごとに盛んになった。趙浚が来ると号令が厳しく明らかなので、将帥たちがとて敬いおそれて相次いで戦勝し、島民たちがそのおかげですこし平安になった。

これより以前、守城の人趙希参がその母をそばで助けて仕え、京山府の城で倭賊を防ごうとして足先が洛東江に及んだが、船がなく渡ることができなかった。敵が追ってくるとその母は「私は年老いて病を患っているから死んでも恨みがない。お前は馬で駆けて災いを逃れなさい。」と言った。趙希参は「お母さんがいらっしゃるのに私がどこに行きましょうか。」と言い、母と一緒に畑の中に隠れた。賊が母を刀で斬ろうとすると、希参が体で母を覆い賊から害を受けて母は死を免れた。

京山府の士林裴仲善の娘が子供を背負って倭賊に追いかける途中、所耶江に至ったが、江の水がはるかに増していた。その女性が逃げられないことを悟り、水の中に飛び込むと、賊が江の岸に至って弓をひき「お前が出てれば死を免れることができる。」と言うと、女性は「私は士人の娘だ。烈女は二人の夫に仕えないという言葉聞いたことがある。たとえ死んでもお前に辱めを受けることはできない。」と言った。賊が弓を射てその子供に命中させ、賊が弓をひいて先程と同じように話をしたが、とうとう出てこず、災いにあつた。

靈山の人郎将辛斯蔵の娘は歳は16歳であるが、倭賊に追われて父に従って江に至り、船に乗って渡ろうとした時に賊が急にやってきて船に乗った人をほとんどみな殺し、その父も害を受けた。ある盗賊がその娘を捕らえて船から引きずりおろすと、娘は「お前が私の父を殺したのだから、不俱戴天の仇だ。たとえ死んでもおまえに従うものか。」と言い、かえって賊の首をつかんで蹴り倒すと、賊が怒ってそ

の娘を殺した。」<sup>20</sup>と記録されている。

ところで『高麗史節要』には『三綱行実図』とは異なり1382年6月に記録しており、趙希参の孝行と辛斯葳の娘の節とともに記録されている。

#### ④ 金氏が盗賊に殺される(金氏死賊)



##### <原典>

金氏。書雲正金彦卿妻也。居光州。洪武丁卯。倭寇本州標掠村落。突至其家。家人奔竄。彦卿夫婦。匿林莽間。倉卒。金行不逮。遂見執。賊欲私之。金曰。寧就萬死。義不受辱。竟不肯屈。賊害之。永樂甲辰。命訪境内善行。州上其事。乃旌門閭。

##### <翻訳>

金氏は書雲正金彦卿の妻である。光州に住んでいたが、1387年(洪武丁卯)に倭寇がこの州に侵入して村落を侵略し、突然その家に至ると、家族達は逃げ隠れて金彦卿夫婦も逃げて林の中に隠れたが、急に金氏の歩みが及ばなくなり、とうとう捕まった。盗賊が姦通しようとしたが、金氏は「一万回死んだとしても義理が辱められることはできない。」と言って、ついに屈しなかったため、盗賊が怒って殺害した。1424年(永樂、甲辰)に命じて地域の善行を探させた際、州でそのことを申し上げ、里門に旌表した。

##### 【詩】

倭寇猖狂突入家。倉皇被執奈如何。  
義無受辱甘趨死。節婦如斯古未多。  
萬死寧爲忍恥生。隕身終守此心貞。  
豈唯旌表光閭里。千載遺編著令名。

倭寇が暴れて突然家に入ってきて、急に捕まってこれをどうしようか。

義理の気があり辱めを受けず自ら進んで死んだが、このような節婦は昔にも多くはない。

一万回死のうとも辱めを受けて生きようか、体を殺して最後まで堅く心を守った。

旌表して村を輝かせただけでなく、千年までも歴史に美名を残すだろう。

『高麗史節要』卷32、1387年11月に「倭寇が光州を侵略して前書雲正金彦卿の妻金氏を捕らえてい

<sup>20</sup> 『高麗史節要』卷31、辛禡8年6月、孫承詰編『韓日関係史料集成』卷2、276ページ、史料471番。『高麗史』卷121、列伝34。孫承詰編『韓日関係史料集成』卷2、75ページ、史料86番。

き、辱めようとしたが、金氏が地に倒れて敵を罵り大きく怒鳴りつけて『お前達はすぐ私を殺しなさい。義理上辱めを受けるわけにはいきません。』といい、進んで害を受けた」<sup>21</sup>と記録されている。強姦を拒否する金氏を倭寇が殺害する場面を模写する。

#### ⑤ 慶氏の妻が節を守る(慶妻守節)



#### 〈原典〉

慶德儀妻某氏。居井邑縣。洪武己巳。倭寇本縣。某被執。守節而死。

#### 〈翻訳〉

慶德儀の妻の某氏は井邑県に住んでいたが、1389年(洪武、己巳)に倭寇が本県に侵入して某氏が捕まったが節を守って死んだ。

#### 【詩】

群盜披猖出不虞。居民小大盡爲。  
唯餘慶婦能全節。高義眞同烈丈夫。  
舍生從義重天倫。肯畏鋒辱此身。  
群賊不能威一婦。氷霜勁節孰緇。

盜賊の群れが思いがけなくやってきて、住民たちがみな捕虜になった。

慶氏の妻だけが節を守ったが、高い義理は誠に毅然とした丈夫のようだ。

命を捨てて義理に従って天倫を重く感じるがゆえに、刃が恐ろしくてこの体を辱められようか。

盜賊の群れも一人の婦人を脅すことができず、氷霜のような固い節を誰が損ねるだろうか。

『三綱行実図』には1389年己巳と記録されているが、『高麗史節要』には1387年12月条に「倭寇が井邑県を侵略し前医正景德宜の妻安氏が住む村に入ったところ、安氏が二人の子供と三人の婢を引いて後園の穴蔵の中に隠れた。敵が探し出して暴行しようとする、安氏が罵って拒否するので、賊が髪の毛をつかみ、刀を抜いて威嚇した。安氏が全力を振り絞って『たとえ死んでもお前たちの言うことを聞くものか。』と罵った。賊は怒って彼女を殺し、子供一人と婢一人を捕まえていった。また中郎将李得仁の妻李氏を捕らえて辱めようとしたが、李氏が死に物狂いで対抗するのでとうとう殺した。」<sup>22</sup>と記録する。

安氏の強姦と殺害、その子供と婢の拉致を記録した。また中郎将李得仁の妻を殺害した事実を記

<sup>21</sup> 『高麗史節要』卷32、辛禡13年11月、孫承喆編『韓日関係史料集成』卷2、295ページ、史料536番。『高麗史』卷121、列伝34、孫承喆編『韓日関係史料集成』卷2、76ページ、史料88番。

<sup>22</sup> 『高麗史節要』卷32、辛禡13年12月、孫承喆編『韓日関係史料集成』卷2、史料537番。『高麗史』卷121、列伝34、孫承喆編『韓日関係史料集成』卷2、76ページ、史料89番。

録した。

### ⑥ 宋氏が死に誓う(宋氏誓死)

<原文>

宋氏。驛丞鄭寅妻也。居咸陽。洪武己巳被倭虜。倭欲之。宋誓死不從。遂見害。



<翻訳>

宋氏は驛丞の鄭寅の妻である。咸陽に住んでいたが、1389年(洪武己巳)に倭寇に捕まり、倭寇が辱めようとする、宋氏が死に誓って従わず、とうとう殺された。

【詩】

貞姿忽爾陷倭中。縱欲汚之誓不從。  
便自殺身能徇義。三韓萬世樹高風。  
執節捐生不失身。摩今古幾何人。  
東方頼有咸陽宋。青史千秋令譽新。

貞淑な人がにわかに倭寇に捕まり、汚されようかというところだったが、誓って従わない。

自ら身を殺して義理に従ったが、三韓の地に代々の高い風格をたてた。

節を守って命を捨て品行を失わなかったが、古今を数えて何人いるだろうか。

東方に幸いに咸陽の宋氏がおり、歴史に千年ほどの名誉がなお鮮やかだ。

『高麗史節要』には倭寇が咸陽に侵入した記事が4件(1379年9月、1384年11月、1388年8月、1389年7月)あるが、1389年7月「倭寇が咸陽・晋州に侵犯したので、節制使金賞が救援に向かったが敗れて死んだ。」という記録がある。原典に1389年己巳年として年代が出ているのでこの時を指しているようだが、これ以上の記録がなく、真偽を確認するのは難しい。

### ⑦ 林氏が脚を斬られる(林氏斷足)

<原文>

林氏。完山府儒士柁之女也。適知樂安郡事崔克孚。倭寇本府。林被執。賊欲之。林固拒。賊斷一臂。又斷一足。猶不屈。被害。

<翻訳>

林氏は完山府の士人林柁の娘であるが、知樂安郡事崔克孚に嫁いだ。倭寇が本府に侵入して林氏

が捕まったが、盗賊が辱めようとする和林氏が固く拒絶した。盗賊は片方の臂を斬り、さらにもう片方の足を斬ったが、それでも屈せず殺された。



【詩】

林氏完山禮義家。倭奴突入肆兵戈。  
兇渠白刃焉能。之死心堅矢靡他。  
貞烈高風舉世驚。臨危捨命不偷生。  
一身取舍分明甚。義重方知死亦輕。

林氏は完山の礼儀ある家門であるが、倭奴が突入して武器を振り回す。

忌まわしい者の刀は傷をつけることができようか。死ぬまで心は固く他の意志は全くない。

その貞節は世がみな驚くに値すほど堅くて高い。危うい時に命を捨てて、つまらなく生きることはしなかった。

この一身の決定がとても分明で、義理が重んじられるので死も簡単に感じられよう。

この記事は『高麗史』や『高麗史節要』には現れず、倭寇が完山府に侵入した記事も見つけることができず、時期を明らかにすることができない。完山は現在の全羅北道の全州と完州の昔の地名である。『高麗史節要』には1375年に倭寇が猖獗し始めた後、1378年10月、1383年8月、1388年5月など3件の記事がある。この中で、1378年10月に、「倭賊が林州を侵犯し、また全州で殺戮して火をつけた。」という記事があり、1388年5月に「倭賊が全州を侵犯して官舎を燃やし、また金堤・萬頃・仁義などの県を侵犯した。」という記事があるのを見れば、二つのうちの一つに該当するものと推定される<sup>23</sup>。

⑧ 辛氏が賊の首を絞める(辛氏扼賊)

〈原文〉

辛氏。靈山人。郎將斯葳女也。性沈毅有識度。洪武壬戌六月。倭賊五十餘騎。寇靈山。斯家避亂。欲濟蔑浦。賊追之甚急。斯一家已在船矣。二子。息。悅。推挽之。會夏方盛。水纜絕。船忽著岸。賊追及射斯。上船又槍之。執辛。欲下船俱去。辛不肯。賊露刃擬之。辛大罵曰。賊奴汝殺則殺我。汝既殺我父。不共戴天之讐也。寧死不汝從。遂扼賊。蹴而倒之。賊怒害之。年二十矣。典法判書趙浚。時體覆防倭。具事牒史館。且聞于朝。立石紀事。以旌表之。

<sup>23</sup> 『高麗史節要』卷30、辛禡4年10月、孫承詰編『韓日関係史料集成』卷2、史料385と『高麗史節要』卷33、辛禡14年6月、孫承詰編『韓日関係史料集成』卷2、史料545。



<翻訳>

辛氏は霊山の人である。郎将辛斯葳の娘であるが、生まれつき落ち着いており強固な性格で識見と度量があった。1382年(洪武壬戌)6月に倭寇50余名が馬に乗って霊山を襲撃してきた。辛斯葳が家族を率いて避難し、蔑浦を渡ろうとしたが、盗賊がとても急に追ってきた。辛斯葳の家族はすでにみな船の上に移って二人の子供辛息・辛悦が船を前後に押し引きしたが、折しも夏の長雨で水が盛んにあふれているので浪が早く、錨綱が切れて船がにわかに岸に着いてしまった。盗賊たちが追いついて辛斯葳を射て倒し、船の上に移ってまた槍で刺すと、辛氏をつかんで船から引きずりおろそうとした。辛氏が応じないと、盗賊が刀を抜いて辛氏を狙ったので、辛氏が大きい声で「盗賊どもめ。お前が私を殺すのならば殺しなさい。お前はすでに私の父を

殺したのだから、天の下で共に生きることができない仇だ。たとえ死んでもお前に従うものか。」と罵った。とうとう賊の首を押さえつけて脚で蹴って倒した。賊が怒って殺したが、その時20才であった。典法判書趙浚がその時体覆防倭使としてその事実を整理し、史館に移牒して朝廷に申し上げ、石碑を建てて事実を記録して旌表した。

【詩】

隨父奔馳欲渡河。寇戎鋒刃亂如麻。毅然不被讐人。千載苔碑孝女家。  
父母之讐不共天。何心從汝下江船。扼罵賊聲彌。雖死芳名永世傳。

父に従って急いで走って河を渡る時、倭寇の刀が麻のように入り乱れる。  
毅然として命を捨てて義理堅い体を守り、千年の苔が生えた石碑に孝女を褒め称える。  
父母の仇とは天を共にしない道理、どういう心でお前に従って船を降りるのか。  
首を絞めて罵る声はなおさら厳しいので、死んだといってもその名前は長く伝わるだろう。

辛斯葳の記事に関しては先に「烈婦入江」の記事が載っている『高麗史節要』卷31、[辛禍]8年(1382)6月条に趙希参と裴仲善の記事とともに収録されている。女性の身で父を殺害したことについて抗議し、節を守ったことについて孝女として旌表された。

⑨潘腆が父を買う(潘買腆父)



<原文>

散負潘腆。安陰人。洪武戊辰。倭賊突入。執其父以歸。持銀帶銀塊。赴賊中。買父而來。

<翻訳>

散員潘腆は安陰の人である。1388年(洪武戊辰)に倭賊が突然侵入して彼の父を捕まえて行ったが、潘腆が銀帯と銀塊を持って倭賊の中に走っていき父を買って帰った。

【詩】

干戈磨漲煙塵。獸駭魚逃競竄身。  
冒刃賊中携父返。一堂歡笑照千春。  
生長窮鄉木石居。一身事業只樵漁。  
憐渠也自天機動。購父歸來樂有餘。

盾と矛が光って煙と塵がみなぎり、驚いて駆ける獣のように先を争って逃げる。  
刀を顧みないで父を求めて行き、その喜びで笑う様子が千年の春を照らすようだ。  
田舎で暮らし木と石を友人として、一身の事業といえば漁と木こりがせいぜいである。  
美しいことに彼に天機が動き、父を買って帰ったので安楽であることが限らない。

安陰は現在の慶尚南道咸陽郡一帯にあった昔の邑で、『高麗史節要』によれば倭寇が咸陽に侵寇したのは1379年9月と1380年8月の2例がある。そのなかで1380年8月の記事には「倭が沙斤乃驛に駐屯し、元帥裴克廉・金用輝・池湧奇・呉彦・鄭地・朴修敬・裴彦・都興・河乙沚が攻撃したが敗戦して朴修敬と裴彦、死んだ士卒が500余名にものぼった。倭賊がついに咸陽を殺戮した。」<sup>24</sup>という記録があることからみると、1380年8月のことと推定される。

以上9件の倭寇加害の惨状をみれば、加害形態は主に女性を強姦して女性が拒否すれば殺害し、幼い子供を拉致するという様相を見せている。また挿絵に描かれた倭寇が所持した武器は弓・槍・刀が登場するが、弓と槍は日本中世の武士が所持した弓と似ていて、槍は長さが2メートル以上で薙刀の長さだけで1メートル以上になる大薙刀であった。もう少し考証しなければならないが、相当に写實的に描写していると考えられる<sup>25</sup>。

<sup>24</sup> 『高麗史節要』卷31、辛禡6年8月、孫承喆編『韓日関係史料集成』卷2、史料435番。『高麗史』卷121、列伝34。孫承喆編『韓日関係史料集成』卷2、74ページ、史料83番。

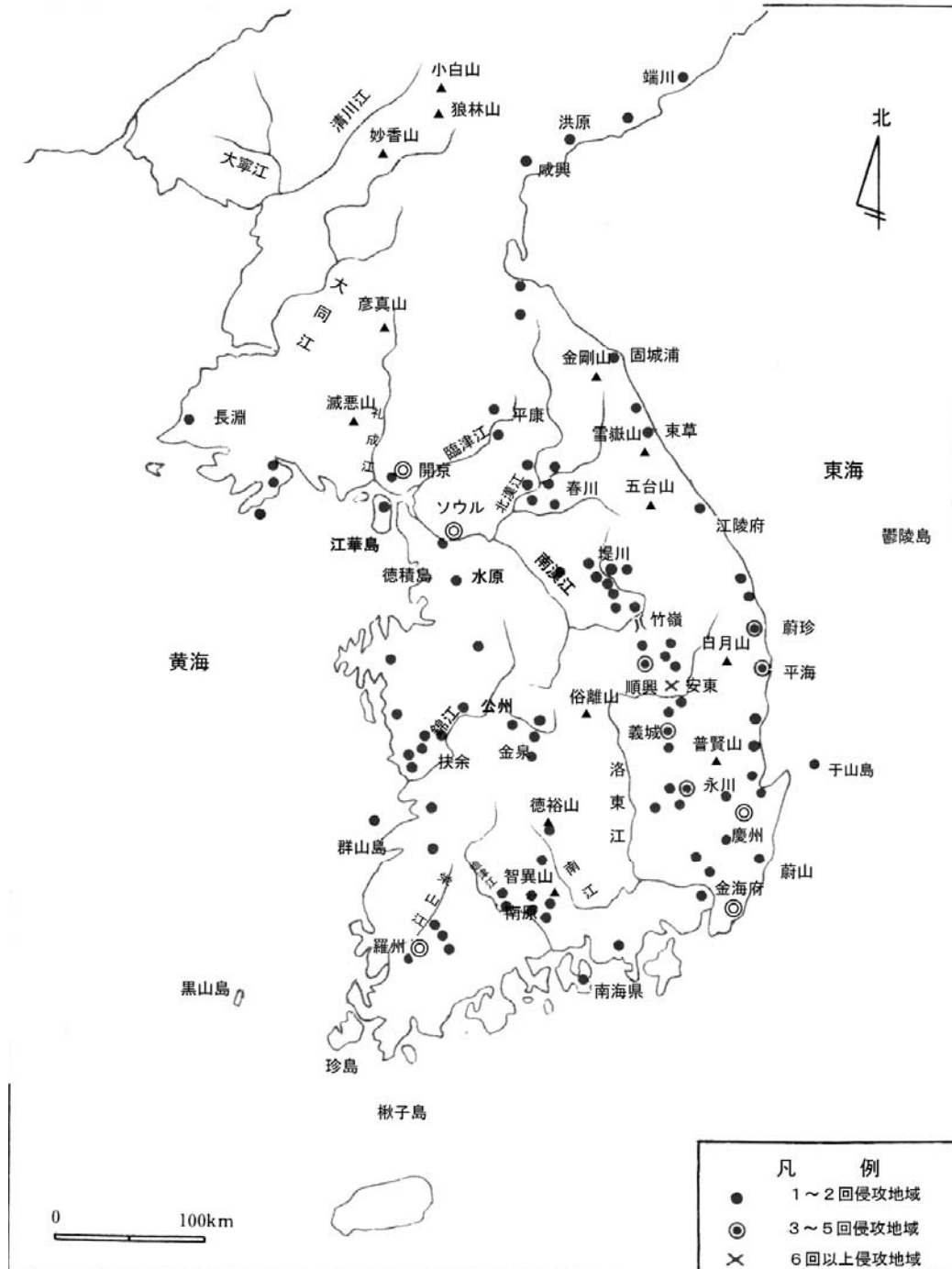
<sup>25</sup> 日本中世の武士の武器に関しては棟方武城筆、笹間良彦監修『日本の甲冑・武具』(東京美術、2004年)およ



そして被害地域を見れば、江華島と慶尚・全羅道の内陸地方に分布している。1993年に国防軍事研究所で作成された1380年代倭寇侵入図をもとにしてこの地域を表示すれば、次の地図のようになる

26。

<1380年代の倭寇侵入現況および三綱行実収録された被害地域>



ひ『蒙古襲来絵詞』を参照。

26 国防軍事研究所『倭寇討伐史』1993年、139ページ(国防軍事研究所『倭寇討伐史』1993、139等)。

#### 4. 「高麗・朝鮮人説」と「済州島海民説」の問題点

現在韓・日間には倭寇の構成と主体問題をとりまく多くの論争がなされている。例を挙げると、『日本史辞典』(岩波)<sup>27</sup>には

倭寇の活動は14世紀後半から15世紀初にまたがるが、その成員は対馬・壱岐・北部九州の日本人を中心として、水尺・才人と呼ばれる韓半島の賤民などを含んでいる。近年では済州島民までも注目している。活動した地域は韓半島・山東半島などを中心としており、食糧の略奪と人間を捕獲した。

とあり、倭寇に高麗賤民を含ませて、最近では済州島民までも注目していると記述している。このような見解は中田稔の「日本における倭寇研究の学説史的検討」で提示されたところのように、1980年代に注目され始めたが、その間の様々な指摘にもかかわらず、検証の手續きなく学会の定説のように引用されている<sup>28</sup>。

『高麗史』には682件、『高麗史節要』には583件、合計1265件の倭寇および日本関連史料が収録されている。そのなかで「高麗人説」の根拠として提示される高麗賤民に関連する史料は3件のみである。その例をみると、

史料1(1382年4月)<sup>29</sup>

「水尺の連中が群れを成して倭賊のふりをして寧越郡を侵犯して官舎や民家を燃やしたので、判密直林成味らを送って追いかけて捕まえ、男女50余名と馬2百余匹を虜獲した。」

史料2(1383年6月)<sup>30</sup>

「交州・江陵道の水尺・才人が偽の倭賊になって平昌・原州・榮州・順興などの地を略奪したので、元帥金立堅と体察使崔公哲が50余名を捕まえて殺し、その妻子を各邑に分けて流配に処した。」

史料3(1388年8月)<sup>31</sup>

「水尺と才人は畑を耕して種をまくことをせず、坐して民の穀物を食べ、一定の産業もなく、一定の心もないので、互いに山奥に集まって倭賊と詐称するが、その情勢が無視することができないので早く図らないわけにはいかない。」

以上の史料を見ると、高麗賤民が倭寇化して略奪を敢行するのは史料1と史料2の2件だけである。また彼らが出没した時は1382年と83年の2事例だけで、その地域も江陵道寧越を中心とした深い山奥

<sup>27</sup> 『日本史辞典』岩波書店、1999年、1214ページ。

<sup>28</sup> 中田稔「日本における倭寇研究の学説史的検討」(本報告書収録)。

<sup>29</sup> 『高麗史節要』巻31、辛禩8年4月、孫承喆編『韓日関係史料集成』巻2、史料464番。

<sup>30</sup> 『高麗史節要』巻32、辛禩9年6月、孫承喆編『韓日関係史料集成』巻2、史料475番。

<sup>31</sup> 『高麗史節要』巻33、辛禩14年8月、孫承喆編『韓日関係史料集成』巻2、史料552番。

である。それだけでなく、彼らが出没した直後、いずれも討伐を敢行した。無論、史料3の記事が1388年なので賤民の倭倭活動が続くこともあろうが、実際には1383年6月以後、倭倭の出現はない。

したがって、この史料だけでみても、高麗賤民の倭倭活動を否定することはできない。しかし、倭倭活動がまったく一時的であり、江原道の山奥の寧越地域付近に限定されていた点を考えると、彼らの倭倭活動を一般化させて倭寇の主体や構成に含めることは再考してみなければならぬと考えられる。

また「朝鮮人説」も1443年の癸亥約条で、朝・日間に各種の通交体制が整備された以後である1446年に判中枢府事であった李順蒙の上疏文に基づいた主張であり、その信頼性が疑われる史料である。李順蒙は上疏文で

臣が謹んで考えますに、国家の声教が遠い所まで行き渡り、辺境に憂いがなく、人民が繁殖して戸口が多くても軍額が増加しないのは、その民に安定した意志がなく、賦役を逃避する人が多いためです。その中には公賤と私賤が異なる道で逃亡して移っていき、自ら両班だと偽っては家柄がある家と婚姻して、子供を作った後に捕まり、もとどおり賤民になった人まで出現し、そのように常道にはずれることがとても多いです。臣が聞きますに、高麗王朝の末期に倭寇が興行して民が生活できないようになりました。しかしその間の倭人たちは1、2名に過ぎないですが、本国の民が偽りで倭人の衣服を着て党をなして乱を起こしたので、これもまた鑑戒されることです。…」<sup>32</sup>

と言った。すなわち、軍役を増加させるために上疏文の中で倭寇についての言及があるが、この内容をもって、「朝鮮人説」の根拠として提示しているのだ。無論、高麗末の倭倭を念頭に置いた主張であろうが、1392年7月の朝鮮王朝建国の後から李順蒙の上疏文がある1446年10月までの倭寇および日本関連の記事2897件のうち、ただ1件の記事である。この1件の記事をもって、それも伝聞による内容を根拠として朝鮮人を倭寇の主力として記述するのはたいへん非論理的であり、合理的でない無理な主張ではないか<sup>33</sup>。

一方、「済州島海民説」の核心内容は、①済州島の高麗本土に対する「異質性と独立性」、②倭寇が動員した大量の馬匹に済州牧の馬が多く混ざっているという説、③1439年前済州安撫使韓承舜の伝聞内容に「旌義縣東方の牛峰、大静県西側の竹島に昔から倭船がこっそり停泊する」という記録、④『成宗実録』13年(1482)閏8月12日の「済州の民たちが沿海の様々な邑に流移して寓居しているが、すでに戸籍に入っておらず、また、今することがなく出入を自由に行い、時折倭人の言葉を学び、倭人の衣服を着て海島を往来してひそかに剽窃をほしひままに行うので、その兆候が心配される。」という記録が根拠となる。

<sup>32</sup> 『世宗実録』卷114、28年10月壬戌、孫承喆編『韓日関係史料集成』卷5、史料2023番。

<sup>33</sup> 李順蒙の上疏文による倭寇の8-9割が朝鮮人だという説については李領「高麗末期の倭寇構成員に関する考察」『韓日関係史研究』第5集、1996年、43-47ページ(李領「고려말기의 왜구구성원에 관한 고찰」『한일관계사연구』제5집、1996、43-47쪽)で①上疏文の主な内容が号牌法に関するもので、倭寇に関してはただ伝聞を引用したという点。②倭寇の主体は新たな民の姿であるという点。③李順蒙が個人的に信頼できない人物であるという点などを挙げて否定した。

この根拠についてはすでに様々な論文で反論ないしは否定的な見解を提示した<sup>34</sup>。しかしなによりもこれらの説の根拠が韓国史についての知識の不足と検証のない抽象的な仮説を押し立てたものであり、論理的で合理的ではないという点である。

例を挙げると、①濟州島の高麗本土に対する「異質性と独立性」は濟州島の歴史に対する歴史知識の不足に起因するものだ。濟州島は様々な研究によれば下記の通りである。12世紀までは高麗から反独立的な地位を持っていたが、1105年に耽羅郡が設置されて直接支配領土になり、13世紀中葉以後、元の直轄地になったが、元の支配を脱する恭愍王初期の1356年(恭愍王5)から約20年の間に何度か反乱があったが、1374年に完全に討伐され、高麗の中央から統制が可能となった。1392年に成立した朝鮮も濟州島に対して土着勢力の懐柔や国家機構への編入および支配制度の貫徹を維持していた。

②「倭寇が動員した大量の馬匹に濟州牧の馬が多く混ざっているという説」も仮説にすぎないひとつの想像である。もし想像のように倭寇が濟州島の多くの馬を動員したというならば、濟州島人の組織的な参与や倭寇との連合なしには不可能だろう。韓日両国のどこからもこれと関連した史料は登場しなかった。

③の史料も村の古老から伝わって聞いた話であり、また内容も「昔に倭船が来てこっそり停泊した(倭船隱泊)した」というものだ。倭寇の根拠地だという内容ではない。しかし「濟州島海民説」ではこの記事をもって濟州島に倭寇の根拠地があり、倭寇と濟州島民が協力関係にあったと主張している。

④の記事は「濟州島人による海賊行為」に関連した史料で「濟州島人が倭人の言語、倭服を着て海島を往来してひそかに略奪を行っている」という内容だ。『朝鮮王朝実録』によれば、全南の順天一带での海賊行為は1471年(成宗2)の記事に初めて登場する。

「(王が)全羅道水軍節度使李惇仁に「今聞くに、順天・興陽・樂安の諸道海島のなかで、8、9人が群れをなして、夜には倭服を着て船に乗って海に出て人を掠ったり、あるいは陸に登って盜賊行為をはたらいたりし、昼にはその服を隠して平民のようにするといひ……」<sup>35</sup>

「…また聞くに、樂安將校金倍と順天に居住する私奴の裒永達・玉山・朴長命ら 30 余名が徒党をくんで 4 隻の船に乗って弓矢を持ち、あるいは倭人と偽り、あるいは濟州人と言ひ、様々な島に停泊して海産物を採取する人をさらひ、また辺境の邑に放火して盜賊行為をするといひ。卿たちは努めて奇策を出して捕獲して申し上げ、煩わしく騒がしくしすぎるのはよくないので、努めて秘密にせよ。」と諭旨した<sup>36</sup>。

<sup>34</sup> 李頴『倭寇と日朝關係史』第4章・5章、東京大学出版会、1999年。同「倭寇の主体」『倭寇・偽使問題と韓日關係』韓日關係史研究論集4、景仁文化社、2005年(동「왜구의 주체」『왜구·위사문제와 한일관계』한일관계사연구논집 4、景仁文化社、2005)。南基鶴「中世高麗、日本關係の争点—モンゴルの日本侵略と倭寇」『日本歴史研究』17(日本史学会)、2003年。金普漢「中世麗・日關係と倭寇の發生原因」『倭寇・偽使問題と韓日關係』韓日關係史研究論集4、景仁文化社、2005年(金普漢「중세 러·일 관계와 왜구의 발생원인」『왜구·위사 문제와 한일 관계』한일관계사연구논집4、景仁文化社、2005)。浜中昇「高麗末期倭寇集團の民族構成—近年の倭寇研究に寄せて—」『歴史学研究』685、1996年。村井章介「倭寇の他民族性をめぐって」大隅和雄・村井章介編『中世後期における東アジアの國際關係』山川出版社、1997年。

<sup>35</sup> 『成宗実録』[卷13]成宗2年、12月壬午、孫承詒編『韓日關係史料集成』卷7、83ページ、史料139番。

<sup>36</sup> 『成宗実録』[卷15]成宗3年2月甲午、孫承詒編、『韓日關係史料集成』卷7、90ページ、史料150番。

しかし彼らの掃討が簡単になし遂げられないと、朝廷では院相会議を行い大々的に討伐を計画して、慶尚道・全羅道の監司・兵司・水司に同様に議論させて多方面に計策を設定して最後まで探し求めて捕まえるようにさせた<sup>37</sup>。その結果、彼らが倭寇ではなく朝鮮人だと明らかになった<sup>38</sup>。しかし彼らが濟州島人だという指摘は出てきてない。

ところで、1477年になると、慶南泗川・固城・晋州地方で豆禿也と称する濟州人が登場する。

慶尚道觀察使と左右道兵馬節度使、水軍節度使に論旨した。

「今ある人が言うには『道内の泗川・固城・晋州地方に“濟州の豆禿也”とだけ名前を称する人が、最初には2、3隻の船を持って出来したが、今は変わって32隻になった。河の岸に寄って家をつくり、衣服は倭人と同じだが、言語は倭の言葉でもなく漢語でもなく、船体は倭人の船よりさらに堅実で、速さもこれよりすぐれる。いつも魚を釣ってわかめを採って生活をしている。そのために郡県でも役をさせられず、近くに住民がみな考えるには、我が国の人を略奪する者がこの輩でなかいかと疑っている。』ということだ。しかし、この言葉をすべて信じることはできないが、また偽りとして扱うこともできない。今刷出しようとするにあたりもし急に行えば、あの輩がみな動いて海の方に逃亡して行ってしまい、変が将来予測できなくなるのではないか心配せざるを得ない。卿は守令と万戸に論旨し、ゆっくり招き集めて安心させ、平安に彼らが居住するようにし、その出入を厳重にし、また驚き騒ぐことがないようにさせよ。』<sup>39</sup>

そして1482年の記事には

持平李義亨が申し上げることには『濟州の放浪する民が晋州と泗川地方に多く寓居しており、戸籍に(名前が)登載されておらず、海中に出没して倭人の言葉を学び、倭服を着て、海産物を採取して民を侵掠するので、推刷して本来の故郷に送り返しますよう請いねがいます。』ということであつた。王が左右に問うた。<sup>40</sup>

という史料を見れば、1470年代から80年代に濟州島の流民が慶尚道沿海で倭服を着て、倭語を使って来て沿海民たちを相手に略奪行為をはたらいていたことを知ることができる。そして朝廷でも彼らに対する徹底した搜索と捕獲を慶尚道と全羅道觀察使に命令した。

以上にみたとおり、1470年代以後1480年代中盤に至る時期に一部濟州島民が慶尚・全羅海岸で沿海民を相手に略奪行為をはたらいていたことは事実である。しかし、この事実だけをもって倭寇の構成に濟州島海民を含ませるといことは首肯しがたい。なぜならばまず彼らの活動時期がすでにいわゆる前期倭寇の活動期をとうに過ぎており、彼らは倭寇とは全く関係ない海賊行為を行っていたのだ。朝

<sup>37</sup> 『成宗実録』〔卷35〕成宗4年、10月辛巳。孫承喆編『韓日関係史料集成』卷7、133ページ、史料255番。

<sup>38</sup> 『成宗実録』〔卷35〕成宗4年、10月辛巳。孫承喆編『韓日関係史料集成』卷7、134ページ、史料256番。

<sup>39</sup> 『成宗実録』〔卷83〕成宗8年8月癸亥。孫承喆編『韓日関係史料集成』卷7、315ページ、史料570番。

<sup>40</sup> 『成宗実録』〔卷145〕成宗13年閏8月戊寅。孫承喆編『韓日関係史料集成』卷8、66ページ、史料955番。

鮮では彼らを「水賊」という固有名詞で倭寇とは別に認識していたのであり、一時的に南海岸地域に出没していた単純な海賊集団であった。このような内容に基づいて済州島海民を倭寇の勢力ないしは構成に含ませるのははたして妥当なことか、再考してみる事項である。

## 5. 結論

以上で14-15世紀の東アジア海域世界の状況を高麗と朝鮮を相手にした倭寇の略奪のありさまと構成問題を中心に考察した。先に言及したところのように14世紀中盤以後倭寇の略奪は大きく3時期に区分することができる。1350年庚寅倭寇に始まった初期の倭寇、1375年以後猖獗期の倭寇、1389年の朴威の対馬征伐以後1443年癸亥約条までを消滅期の倭寇とした。そして初期倭寇と猖獗期倭寇の発生契機になった背景として日本の九州地域の政治的状況を挙げたい。すなわち初期倭寇は足利直冬九州移動と在地武士との対立が契機となり、猖獗期倭寇は今川了俊が九州探題になって形成された「反探題勢力」が倭寇の主力になり、倭寇集団が大型化して、略奪がさらに頻繁になったと考える。

無論、倭寇がこれらの集団だけで構成されるのではなく、いわゆる三島倭寇を基盤としており、これらの集団が主軸になり組織化されて大規模化したものと判断される。これを証明する代表的な史料が1377年8月『高麗史節要』に登場する逃亡した輩(逋逃輩)であり、1387年8月に対馬島征伐を建議した鄭地の主張に登場する。鄭地は対馬島征伐を主張し、

「倭国は全国が盗賊ではなく、その国で反乱を起こした民たちが対馬と壱岐の二島を分けて占領しましたが、合浦と近いためにいつでもやってきて盗賊活動をするので、もし罪を糾弾して大きく軍を興してその巢窟を征服するならば、辺境の心配が永久になくなりましょう。」<sup>41</sup>

と述べた。ここでその国で反乱を起こした民という指摘が、すなわち猖獗期の倭寇の主力ではないだろうか。

しかし現在、韓・日間では一部日本の学者たちの主張により、倭寇の構成に「高麗・朝鮮人」さらには「済州島海民」が含ませることが歴史争点になっている。本文で言及したように「高麗・朝鮮人説」は1382年と83年に江原道寧越地域の倭倭を根拠としていたという点で、そして「済州島海民説」はいわゆる前期倭寇の時期を過ぎた1470-80年代の済州島海民から構成された水賊の一時的な海賊行為という点で論理的に妥当な見解だと考えるのは難しい。

結論的にいうと、14-15世紀の韓半島を略奪の対象としていた前期倭寇の目的は沿海地域や漕運船または内陸の漕倉などを襲撃して食糧と人を略奪することであり、彼らの根拠地はいわゆる三島(対馬・壱岐・松浦)地域で、発生の主要原因は一次的には三島の経済的な窮乏と南北朝末期の九州地域の政治状況が繋がっていたと考えられよう。そして倭寇が大規模に集団化し、猖獗するようになる

<sup>41</sup> 『高麗史節要』[卷32]辛禡13年8月、孫承喆編『韓日関係史料集成』巻2、294ページ、史料534番。

のはこれらの地域の政治勢力が積極的に介入したためだと判断される。それだけでなく、彼ら倭寇の略奪形態が女性を強姦して殺し、赤ん坊を拉致するなど極悪非道になるのも単純な経済的な窮乏を解決するという次元ではないと思われる。

しかし残虐だった倭寇も15世紀にさしかかると、高麗・朝鮮の積極的な軍事・外交・懐柔政策と室町幕府または倭寇勢力自体の積極的な努力によって向化倭人・興利倭人・使送倭人に転換されていき、15世紀中葉以後東アジア海域世界を変貌させていった。14-15世紀の韓日関係では、この時期は「掠奪の時代」から「共存の時代」に変化する時点であり、「倭寇の加害」と「高麗・朝鮮人の被害」という相反した行為が存在していた時点でもある。以後「東アジア海域」という空間は「加害者倭寇」と「被害者高麗・朝鮮人」たちに交流と共存のための空間であったことを思い起こしながら、「海域史」についての新たな視角の研究が進展されることを期待する。